

アルファベット

K T境界(ケイティーきょうかい) : 恐竜(きょうりゅう)やアンモナイトなどが生きていた中生代(ちゅうせいだい)とそれらが絶滅した新生代(しんせいだい)の境のこと。約6,500万年前。

K T境界層(ケイティーきょうかいそう) : K T境界を示す地層のこと。日本では浦幌町川流布(かわるっぶ)にだけ見ついている。(p25)

U字谷(ユーじこく) : 横断面がU字形の谷。氷河が流れる時にできる谷は多くがU字谷になる。 V字谷(ブイじこく)

V字谷(ブイじこく) : 横断面がV字形の谷底がせまい谷。速い流れが川底を下へけずってできる。 U字谷(ユーじこく)

あ

アイヌ(アイヌ語) : 「アイヌ」ということばには、(神や動物に対しての)人間という意味、(メノコ〔女性〕に対しての)男性という意味、(民族名としての)アイヌという意味がある。(参考 : 『アイヌ語沙流方言辞典』より)

アイヌ文化振興法(アイヌぶんかしんこうほう) : アイヌの人々の民族としての誇り(ほこり)が尊重される社会を実現しようとするための法律。正式には「アイヌ文化の振興(しんこう)並びにアイヌの伝統(でんとう)等に関する知識の普及(ふきゅう)及び(および)啓発(けいはつ)に関する法律」という。(p150)

アイヌモシリ(アイヌ語) : アイヌ(人間)の国。これに対して、カムイ(神)が生活する世界のことをカムイモシリ(神の国)という。自然の生き物や自然現象などは、カムイモシリからカムイが何かの目的をもってアイヌモシリにやってきたもの、もしくはやってきたことによって起きたことである。

亜炭(あたん) : 水底にたまったかれ草やかれ木があまり分解されず(くさらず)土にかえられないままたまり、だんだんと炭になっていったもの。泥炭(でいたん)が地熱や圧力で、さらに炭になっていった(炭化した)もの。広い意味の石炭に入り、石炭としては質が悪い(炭化度が低い)もの。亜炭というのは日本独自の呼び名で、正式には「褐炭(かつたん)」という。また、褐炭のうち質が悪いものを亜炭ということもある。(p41)

い

イオマンテ(アイヌ語) : 山で子グマをつかまえたとき、コタン(集落)に連れ帰り1年ほど大切に育てる。その後、子グマの霊(れい : カムイ)におみやげをもたせて、クマのカムイの親元(カムイの国〔カムイモシリ〕)に帰して(送って)あげるという儀式(ぎしき)。クマのほかにはシマフクロウなどでもおこなわれる。自然のめぐみへの感謝と、これからもめぐみがあるようにとの願いがこめられる。

イオル(アイヌ語) : 伝統的なアイヌ文化で、あるコタン(集落)や個人が漁や植物採集、狩り(かり)などのために利用する、川や山野の範囲(はんい)のこと。

イクパスイ : 木で作ったヘラのようなもので、カムイにいのり、語りかける時に手に持つ。イナウとともにカムイへことばを伝えてくれる。(p134)

遺跡(いせき) : 昔の人々の生活のあと、昔つくられたものや建

物のあと、あるいはほられた穴のあとなどが集まり、広がりをもって残されているところ。地表のものはこわされたり、風化したりしてなくなりやすいため、土などにおおわれて地中になったところに残されることが多い。遺跡で見つかったもののうち、石器や土器など移動させることのできるものを遺物(いぶつ)といい、家のあとや墓穴のあとなど移動させることができないものを遺構(いこう)という。(p70)

遺存種(いぞんしゅ) : 過去に栄え、その後はおとろえている生物のこと。北海道のナキウサギなどは氷期の遺存種である。個体数が減ったもの、分布がせまくなったものも遺存種である。レリックまたは生きている化石ともいう。(p63)

一級町村(いっきゅうちょうそん) : 町村会の議員が住民によって選ばれ、町村長を町村会の選挙で選ぶことのできる町や村。

イナウ(アイヌ語) : 木の棒をけずって作った祭祀具(さいしぐ)。カムイ(神)にささげ、カムイに語りかける時にはイクパスイとともにことばの仲立ちをする。また、イナウ自体がカムイへのおみやげであり、家の中にかざっているイナウが多いカムイほど、人間からたよりにされていることになる。(p134・p122・p128)

イバキッニ(アイヌ語) : サケの頭をたたいて殺す道具。ただの道具ではなく、カムイにことばを伝え、カムイへのおみやげとなる「イナウ」のひとつとされた。(p122)

う

ウライ(アイヌ語) : 小川で魚をとるしかけ。川に立てた数本のくいにヤナギの枝をからませることで魚の行き場をさえぎり、魚がラオマツという「どう」の中に入りこむようにしたもの。(p119)

え

駅通所(えきていしょ・えきていじょ) : 北海道の開拓時代(かいたくじだい)、開拓者や商人、旅行者などの宿泊所であり、人や馬の貸し出しをしたところ。駅通所制度は昭和21年(1946)まで続いた。(p163)

エコロジー(Ecology : 英語) : もともとは「生態学(せいたいがく)」とあって、生き物のことを生き物同士のつながりや、周りの環境(かんきょう)とのつながりによって研究する学問のこと。今では自然環境に関すること、ゴミ・公害・健康問題など人間が暮らす環境のこと、また、それらのことを考えること、さらに、考えた結果の暮らし方、ものの見方や工夫(くふう)、つくり出されたものなども指す。

エゾ(蝦夷) : いろいろな説があるが、平安時代(へいあんじだい)の末以降、「エミシ」と読んでいた「蝦夷」を「エゾ」と読むようになり、地名としては北海道を指し、人間の集団としてはアイヌ民族を指すようになったともいう。江戸時代(えどじだい)には、道南にあった松前藩(まつまえはん)の直接支配地を「和人地(わじんち)」と呼び、それ以外の北海道の大部分をアイヌ民族の土地として「蝦夷地(えぞち)」と呼んだ。

エミシ(蝦夷) : いろいろな説があるが、古代日本で大和朝廷(やまとちやうてい)が支配を広げる中、東北地方以北で大和朝廷に従っていなかった人々に対する、大和からの呼び名ともいわれる。アイヌ民族(の祖先)もふくまれる。鎌倉時代(かまくらじだい)のころから「蝦夷」をエゾと読むようになり、北海

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今そして未来へ

用語 さくいん

道とアイヌ民族（の祖先）を指すようになったともいわれる。
えん堤（えんてい・堰堤）：川の水や土砂（どしゃ）をせきとめるために、川の流れを横断してつくられた構築物のこと。（ p194）

か

カール（Kar・ドイツ語）：氷河となる氷ができた、山頂近くにある半円形の谷地形のこと。圏谷（けんこく）ともいう。

櫂（かい）：水をかいて舟（ふね）や船を進める道具。

海溝（かいこう）：海底が細長くみぞのようになっているところで、深さ6kmより深いものをいう（浅いものはトラフ）。北海道の東南部には千島海溝（ちしまかいこう）があり、本州の東部には日本海溝がある。マリアナ海溝の最深部は1万m以上の深さがある。プレートがほかのプレートの下にすみこむところ。（ p23）

海進（かいしん）：地球が温暖になると、氷河（ひょうが）や氷床（ひょうしょう）など陸上にある氷がとけて、その水が海に流れこむ。すると海水が増え、海水面が高くなり、そのため陸地がせまくなる。海が内陸に進んでくることになるので、これを海進という。約6千年前（縄文時代〔じょうもんじだい〕前期）には氷期のあと最も暖かい気候となり、この時の海進を縄文海進（じょうもんかいしん）という。（ p84） 海退（かいたい）

海成層（かいせいそう）：海の底にたまったものでできた地層。長い間に地面がもり上がることで、今では丘（おか）や山になっていることもよくある。（ p33）

海退（かいたい）：地球が寒冷になると、地上に降った水分がこもりついて海に流れこむ水の量が減る。これによって海水面が低くなり、陸地が広がる。海岸線が海側へ後退するので、これを海退という。最近の氷期（約8万～1万年前）の時には、北海道はサハリンと、サハリンは大陸と陸続きになったため、北海道は大陸からのびる半島の先だった。（ p62） 海進（かいしん）

開拓（かいたく）：山野を切り開いて、田畑にすること。

開拓使（かいたくし）：北海道など北方の開拓のため、明治2年（1869）から明治15年（1882）まで置かれた役所。

開発（かいはつ）：土地や資源などを、暮らしや産業のある目的に合わせて利用しやすくすること。

外来種（がいらいしゅ）：おもに人間の活動によって持ちこまれた、もともとその地域にいなかった生き物。 在来種（ざいらいしゅ）

海嶺（かいらい）：海底山脈のこと。プレートが生まれ、分かれていくところで、地下からマグマがのぼってくる。（ p23）

鍵層（かぎそう）：広い範囲（はんい）にあり、ほかの地層と見分けが付きやすく、どちらかという短い期間でたまったため、はなれた場所にある地層の新旧を判断する基準となる地層のこと。火山灰（かざんばい）の地層は、鍵層によく使われる。（ p21）

火口（かこう）：火山活動によって、地下のマグマや火山ガスがふき出す場所。または、かつてマグマなどがふき出したことによってできた円形に近いくぼみ。多くの場合、直径約1km以下。

火砕流（かさいりゅう）：火山が爆発的（ばくはつてき）に噴火（ふんか）した時などに、くだけ散ったマグマ（火山灰や火山れき）が高温のガスと一体になって、重力によって流れ下るもの。数百 ととても熱く、時速数十km（100kmをこえる時）も）ととても速いので、おそわれたらまず助からないというおそろしい火山の活動。（ p336）

火山（かざん）：地下深くにあったマグマや火山ガスがふき出すところ。ふつうは地形的な高まりをいうが、爆発（ばくはつ）や陥没（かんぼつ：落ちくぼむこと）によってできた地形もふくめる。水中にもある。

火山岩（かざんがん）：火成岩（かせいがん）の中で、マグマが急に冷やされてできた岩石。多くが火山からふき出してできる。溶岩（ようがん）や凝灰岩（ぎょうかいがん）など。

火山灰（かざんばい）：火山からふき出したもので、マグマが粉々にくだけたもの。木や紙などが燃えてできる灰とはまったく異なる。地質学では直径2mm～1/64mmまでのものをいう（2～64mmのものは「火山れき」、64mm以上のものは「火山岩かい」）。また、工事や園芸などで利用するために凝灰岩（ぎょうかいがん）をけずり取ったものも、火山灰と呼ばれる。

火山れき（かざんれき・火山礫）：火山からふき出したマグマがくだけたもので、直径2～64mmのもの。2mm以下は「火山灰」、64mm以上は「火山岩かい」。

火成岩（かせいがん）：マグマが固まることでできた岩石。火山岩（かざんがん）と深成岩（しんせいがん）などに分かれる。ほかの岩石としては堆積岩（たいせきがん）と変成岩（へんせいがん）がある。

化石（かせき）：昔の生き物の体や生き物が残したあと。（ p21）

河川敷（かせんしき）：堤防（ていぼう）と堤防の間などで、ふだん水が流れていない平地のこと。正式には高水敷（こうすいしき）という。洪水（こうずい）の時に水が流れるところ。広い意味では、ふだん水が流れているところ（低水路）も河川敷にふくまれる。

河川法（かせんほう）：川をどのように管理し、どのように利用するかについて定めた法律。（ p205）

活火山（かつかざん・かつかざん）：おおむね過去1万年以内に噴火（ふんか）したことがわかっている火山と現在活発な噴気活動（ふんきかつどう：ガスがふき出すこと）のある火山（火山噴火予知連絡会・気象庁による定義）。

カムイ（アイヌ語）：「神」のこと。自然の生き物や自然現象を中心に、さまざまなカムイがいる。（ p134）

カムイチェブ（アイヌ語）：サケのこと。神の魚という意味。

カムイモシリ（アイヌ語）：カムイ（神）の国。これに対してアイヌ（人間）が生活する世界をアイヌモシリ（人間の国）という。自然の生き物や自然現象などは、カムイモシリからカムイが何かの目的をもってアイヌモシリにやってきたもの、もしくはやってきたことによって起きたことである。

軽石（かるいし）：火山からふき出したもので、穴がたくさんあいているかたまりのうち、明るい色をしたもの。黒っぽいものは「スコリア」という。マグマにとけていた水分などがガス化して穴をあけた。軽石の火山灰もある。ただ、一般的には細か